

ひとり子をお与えになったほど

ヨハネの福音書 3章 16-21 節

はじめに

今日からクリスマスを待ち望むアドベントに入ります。16節の御言葉は、聖書の中で最も有名な御言葉の一つです。宗教改革者のマルティン・ルターは、この御言葉を「小さな福音書」と呼んだそうです。つまり、キリスト教の中心的な教えである「福音」を最も短く的確に言い表した言葉ということです。

1. 神は世を愛された

16節の御言葉の中心は、神様の愛です。神様は「世」を愛していると言うのです。では、「世」とは何でしょうか。「世」とは、世界のことですが、聖書では特に、神様に背く世界や人類、または神様に敵対する世界や人類を「世」と表現します。ヨハネ 1：9-11 には、このようにあります。「**すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった**」。「世」とは、神様が造られた世界や人類を意味します。しかし、神様が造られた世界や人類は、神様ご自身を受け入れず、背を向けたのです。神様が愛した「世」というのは、神様を受け入れず、背を向ける世界や人類のことです。その意味で、神様が「世」を愛したということは、世界や人類に対する神様の一方的な愛、無条件の愛が語られているということです。

この16節の御言葉と同じような内容のⅠヨハネ 4：10には、こうあります。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです**」。この御言葉も神様の一方的な愛、無条件の愛をよく言い表しています。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛した」のです。私たちが神様を愛する前から、神様を信じる前から、神様に背を向けている時から、神様は私たちを愛してくださったのです。神様の愛は、一方的で、無条件なのです。

では神様は、神様を受け入れず、背を向ける「世」をどれくらい愛しているのでしょうか。その愛の大きさは、どれくらいなのでしょう。それは、「**ひとり子をお与えになったほど**」です。「ひとり子」というのは、「唯一の子ども」「ただ一人の子ども」という意味です。神様には、何人も子どもがいて、そのうちの一人を与えたというのではないのです。神様には、一人しか子どもがいなくて、その唯一の、ただ一人の子どもを与えたということです。神様の「唯一の子ども」「ただ一人の子ども」は、ご存知のようにイエス様です。私たちにも子どもが一人しかいなくて、その一人の子どもを手放せと言われたら、どう

でしょうか。それがどんなに辛く、心の痛いことであるかは想像に難しくありません。

旧約聖書にアブラハムという人物が登場してきます。彼は、年老いてからイサクという子どもを与えられます。しかしある時、神様はアブラハムに「その子を全焼のささげ物として献げなさい」と言われるのです。何とも理不尽な命令です。しかしアブラハムは、神様の命令に従って、ひとり息子を縛り、刃物を取って屠ろうしました。するとその時、天から声がして、「**その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった**」(創世記 22:12)と言われたのです。この神様の理不尽な命令は、アブラハムが本当に神様を恐れているか、本当に神様を愛しているかを試す試練であったのです。「自分のひとり子を惜しまずにささげること」、それは、その人の愛が本物かどうかを試す最高の方法なのです。アブラハムを試した神様は、今度はご自分がアブラハムと全く同じ方法で「ひとり子を惜しまずにささげること」を通して、ご自分の「世」に対する愛が、いかに本物であるかということを示されたのです。

では、神様はなぜひとり子であるイエス様を、この世にお与えになったのでしょうか。17節には、「**神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである**」とあります。神様は、世を救うために、イエス様をささげられたのです。ここで分かることは、世は救われなければならないということです。世は、神様を受け入れず、背を向ける世界や人類です。世は、神様を受け入れず、背を向けているため、神様に裁かれ、滅ぼされなければならないのです。

聖書は、人類最初の人であるアダムとエバが、神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、全人類に罪の性質がもたらされたと教えています。すべての人間が罪の性質を持っているということです。罪の性質とは、神様を受け入れないこと、神様の命令に背くこと、神様を信じないことです。それゆえすべての人間が、神様に裁かれ、滅ぼされなければならないと聖書は教えています。その意味で、すべての人間は、神様の裁きと滅びから、救われなければならないのです。

私たち日本人は、救われなければならないという認識をほとんど持っていません。死んだ後に、天国や地獄があるとは考えておらず、もしあったとしても相当な極悪人でなければ、みな天国に行けると思っているようです。というよりも、死んだら神や仏になるとさえ思っているのです。これは、聖書の教えと全く違うものです。聖書は、人類はみな罪人で、基本的にみな神様に裁かれ、滅ぼされると教えています。そして人類はみな、救われなければならないと教えています。日本人は非常に楽観的ですが、聖書の教えは非常に危機的なのです。聖書は、人類に救いの道を説いているのです。神様が、私たち人類を愛してくださって、ひとり子であるイエス様をこの世に遣わしてくださいました。そして、そのイエス様によって、私たちを救おうとされているのです。聖書は、私たち人間は罪の性質を持ち、神様を受け入れず、神様の命令に背き、神様を信じようとしないため、神様に裁かれ、滅ぼされる存在だと教えています。しかし同時に聖書は、神様は私たち人間を愛

し、救われてほしいと願っていて、その救いのためにひとり子であるイエス様をこの世に遣わされたと教えているのです。

2. 御子を信じる者と信じない者

では、神様が私たち人間を愛し、私たち人間に救われてほしいと願っているのなら、すべての人が救われるのでしょうか。神様が愛の方であるなら、全人類を救えば良いと多くの方が言います。神様は、一方的に、無条件に、私たちを愛してくださいます。しかし神様は、一方的に、無条件に、私たちを救うことはしません。神様の救いには、条件があるのです。しかしその条件は、一つしかありません。決して難しい条件でもありません。その気になれば、今日、この場でできることです。それは、神様のひとり子イエス様を信じるということです。16節には、「**御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つ**」とされています。また18節に、「**御子を信じる者はさばかれない**」とされています。神様のひとり子イエス様を信じる人は、決して滅ぼされることなく、裁かれることはないのです。むしろ「永遠のいのち」を与えられて、救われるのです。なぜイエス様を信じる人は救われるのでしょうか。イエス様が、神様と私たちの仲介者となってくださるからです。イエス様は、私たちのために神様にとりなしてくださいます。私たちの罪を背負って十字架に架かり、私たちの代わりに罪の罰を受け、裁かれてくださいました。それゆえに、イエス様を信じる人は、裁かれず、滅ぼされずに済むのです。イエス様は、私たちを裁きと滅びから救う、救い主なのです。

イエス様を信じれば救われる、非常に単純で、簡単なことです。何日も、何年もかかることはありません。沢山の勉強をしなければならぬとか、沢山の修行をしなければならぬということでもありません。その気になれば、今日、この場でできることです。年齢も、性別も、社会的地位も、国籍も関係ありません。誰にでも開かれている救いの道です。しかし実際には、信じる人と信じない人がいるのです。多くの方は、なぜ信じないのでしょうか。それには様々な理由があるでしょう。しかし今日の聖書箇所18-20節には、信じない人の一つの理由について説明されています。「**信じない者はすでにさばかれています。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない**」。

ここでは、イエス様のことが「光」と表現されています。人々はなぜ光であるイエス様を信じないのか、人々はなぜ光であるイエス様よりも、闇を愛するのか、それは、「その行いが明るみに出されることを恐れて」いるからだとあります。空中の埃（ほこり）は、普段あまり気になりません。しかし太陽の光に照らされると、空中の埃（ほこり）が目に見えて分かります。同じように、神のひとり子イエス様の前に出ると、私たちは、自分の行いが悪いことがはっきり分かるようになるのです。自分が罪深いということがはっきり分かるようになるのです。そして、自分がいかに神様の命令に背いてきたかが分かるよう

になるのです。しかし私たちは、自分の間違いをなかなか認めたくないのです。自分の今まで生きてきた人生を否定したくないのです。もしイエス様を信じたら、自分の罪を認めなければならなくなり、自分の人生のある部分を否定しなければなりません。それを私たちはしたくないのです。勇気のいることだからです。ですから私たちは、神様やイエス様と向き合うことを避けて、人と自分を比べて、自分はまだマシな人間だと考えてみたり、過去の自分と比べて、あの頃の自分よりはまだマシだと考えてみたりして、自分を保とうとするのかもしれません。私たちは、神様やイエス様、また自分自身と向き合うことを恐れて、イエス様を信じようとしたくないのかもしれません。しかし、神様が用意してくださった救いの道は、一つしかありません。それは、自分のこれまでの人生をイエス様の光の前に、すべてさらけ出して、イエス様の救いに信頼するほかありません。神様の愛は、一方的で、無条件です。私たちの救いを誰よりも願っておられます。そのためにイエス様を遣わして、救いの道を用意してくださいました。あとは、私たちが覚悟を決めて、神様のひとり子イエス様を信頼するかどうかだけです。

おわりに

今日の聖書箇所にあるように、私たちはすでに裁かれています。この裁きから救われるためには、イエス様を信じるしかありません。では、イエス様を信じるとは、どういうことでしょうか。最後に、二つのこととお話して終わりたいと思います。

イエス様を信じるとは、イエス様を信頼することです。イエス様に任せる、委ねると言っても良いと思います。「ハイデルベルク信仰問答」には、「まことの信仰とは何ですか」という問いがあって、次のように答えています。「それは、神が御言葉において、わたしたちに啓示されたことすべてを、わたしが真実であると確信する、その確かな認識のことだけでなく、福音を通して聖霊がわたしたちのうちに起こしてくださる、心からの信頼のことでもあります」。イエス様を信じるとは、まず聖書が語っていることはすべて真実であると認識することだけでなく、イエス様を心から信頼することです。つまり頭で認識することも大切ですが、それだけでは不十分だと言うのです。大切なのは、正しい認識に基づいた心からの信頼なのです。イエス様を信じるとは、イエス様は神のひとり子であるとか、救い主であるとか、私たちのために十字架に架かってくださったと知るだけでは不十分なのです。そのイエス様に、これから信頼して歩むかどうか、これからの人生をこのイエス様に任せて、委ねていくかが大切なのです。

二つ目のことは、21節に「真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る」とあるように、イエス様を信じる人は、これからの人生を、真理を行って歩いていくようになります。つまりイエス様に従って歩いていくようになります。しかし「その行いが神にあってなされたことが明らかになる」とあるように、これからの人生も、神様が導いてくださるのです。イエス様に従う力は、神様が与えてくださるのです。ぜひ神様の愛を受け取り、イエス様に対する心からの信頼で応えていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、神様に造られた存在です。しかし私たちは、神様を受け入れず、神様の命令に背いて、神様を信じないで歩んできました。しかしそれでも神様は、私たちを愛してください、ひとり子のイエス様を私たちに与えてくださいました。どうか私たちが、神様の愛を受け入れ、私たちの唯一の救いの道であるイエス様を心から信頼させてください。すべてがあなたの前に明るみになることを恐れず、全知全能のあなたに委ねていけますように。あなたの愛に任せていけますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。